

### 2025年 先輩会活動概要

先輩会会員の皆様、日頃から先輩会活動にご支援ご協力をいただき感謝申し上げます。

今年の先輩会活動として、まず 10 年ぶりとなるバンテリンドームナゴヤでの OB 野球大会を、75 周年記念行事として 3 月 29 日に開催しました。1 月末に告知し準備は短期間でしたが、50 名を超える OB 諸氏のご参加いただき、ありがとうございました。当日は現役が朝日大学

(岐阜) とのオープン戦を行い、その後 OB 戦が硬式球で小足さん・田中さん (S41) の大先輩バッテリーによる始球式から始まりました。出場した選手はファインプレー、ハッスルプレーの連続で、また OB の家族、現役の家族の方にもグランドに降りていただき、楽しまれましたことと思います。費用はかかりますが 5 年ごとに開催の計画ですのでご期待してください。



七大学 OB 戦は今年も酷暑の中、8 月 9 日に開催され、横井さん (S51) はじめ久々の参加の比江島さん (H2) など 22 名がプレーしました。11 月に予定の現役との OB 戦はグランド不良で中止となりました。リーグ戦の納会が春、秋に開催され指導陣ほかの OB も参加しました。先輩会の役割としてのもう一つの大きな柱、現役支援のうち、現役指導は引き続き監督・柘植さん (S58)、コーチ・真野さん (S57)、畠本さん (H6) が行いました。リーグ戦では試合中のベンチワークは真野さんが行い、4 年原さんが学生コーチをし、柘植さん、畠本さんはベンチ外という体制がほとんどでした。

春リーグ戦は 4 勝、秋リーグ戦は 5 勝を挙げ、ともに二部首位校との対戦で 1 勝ずつ挙げています。4 年生がチームワークよく、主将の捕手・三橋、投手・藤田、内野・後藤、外野・今井と攻守の要を占め強力な布陣でした。加えて、3 年の投手・坪は春秋リーグ戦で防御率 1 位、3 年の内野・角矢は春リーグ戦で首位打者を獲得しました。来年も十分期待できると思っています。また対抗戦では、名阪戦は勝利、七大学戦は 1 勝 2 敗で 4 位、東海国立戦では準優勝でした。

先輩会の現役支援としてもう一つ、会費を原資とした現役支援金がありますが、これも物価上昇から十分とは言えなくなっています。加えて、山の上グランドの設備が老朽化し、とくに本部席として使用しているプレハブは屋根と床が壊れてきており、名古屋大学からの支援がいよいよ待てなくなりました。そこで現役諸君の努力もあって、名大基金 (<https://kikin.nagoya-u.ac.jp/>) の中の特定基金に、野球部を支援する事業を作りました。控除も受けられる受け口としてここに寄付いただくと、野球部の練習環境の整備に支出することができます。よろしくご協力をお願いいたします。

最後になりますが今年も残念なお便りがありました。1 月に江崎さん (S45)、11 月に濱沖さん (S47) がご逝去されました。濱沖さんは東京支部の代表・副会長などを務められ、会の最後にはいつも元気に締めをされていました。お二人のご冥福をお祈り申し上げます。

皆様には是非、球場での応援に足を運んでいただきますとともに、OB 戦、納会などの催しへの参加をお願いします。そして今後も変わらぬ先輩会へのご支援、ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

(先輩会会長 加藤健司)

### 七大 OB 戦

第 30 回七大学 OB 野球大会が、8 月 9 日に東大球場で開催されました。今年も朝から暑い中での試合となりましたが、皆さまのおかげで無事に戦い抜くことができました。

今年は 1 勝 1 敗という結果でした。第 1 試合の東北大戦 (名大 6-2 東北大) では、連打でしっかりと得点し、守備でも 2 イニング連続の併殺が出るなど、いいリズムで試合を進められました。第 2 試合の阪大戦 (阪大 5-2 名大) は若い相手打線に押されてしまいましたが、アンダースロー投手を相手に一時逆転する場面もあり、内容としては明るいところもあった試合でした。

記念大会のイベントとして、ボール回し競争を行いました。結果は全体 3 位。試行錯誤の多いイベントでしたが、思いのほか盛り上がりしましたので、幹事一同ほっとしております。今後に向けてご意見などあれば、幹事まで遠慮なくお知らせください。

試合後の恒例、懇親会では、今年も幅広い年代の皆さんで交流ができ、良い時間を過ごせました。来年も同じ時期に開催予定です。特に関東近郊在住の OB は、一打席・一イニングだけの参加でも歓迎ですので、ぜひ気軽にご参加ください。

2 年後の 2027 年には名大が全体幹事となります。大会を続けていくためにも、若い世代の参加・勧誘にご協力いただけたとあります。写真やスコア、試合動画は、先輩会 HP (Dropbox) に掲載しています。



東京事務局 新村 (H18 卒)

## 2025 年度を終えて

今年度は春リーグ 2 部からのスタートとなった。昨年度の主力であった投手の西、宮崎、河合、打撃で活躍した荘司、石川、田中が抜けた後、どのように戦うかが課題であった。投手陣は藤田（経 4・旭丘）と坪（工 3・大垣北）が先発し、最小失点に抑えることを目指した。

春のキャンプは昨年同様、くろしおスタジアムで行われ、天候にも恵まれた。オープン戦は静岡、関西に遠征し、計 19 試合を戦った。先輩会 75 周年記念として、バンテリンドームで朝日大学とのオープン戦も実施された。

春のリーグ戦は 2 部 A の強豪校である名院大、東邦大、名商大、星城大、名産大と対戦し、リーグ上位を目指して戦った。

開幕戦は名商大戦。藤田（経 4・旭丘）が先発し、相手打線を 3 点に抑える好投で完投。攻撃では後藤（工 4・刈谷）、三橋（農 4・伊勢）、角矢（向陽 3 年）、荒谷（工 2・大乗寺）



の 2 墓打で得点を重ねたが、惜しくも敗戦。第 2 戰は坪が 7 回まで 3 点に抑えたが、リリーフの浅野（工 4・一宮）、廣田（工 3・明和）が失点し敗北。攻撃は 4 安打無得点に終わり、打線の立て直しが急務となった。

第 2 戰の名産大戦では、藤田、浅野、廣田、千葉（医保 2・盛岡第一）のリレーで 3 点に抑え、攻撃は初回に 10 点を奪い、12-3 で快勝。第 3 戰の名院大戦では、藤田が HR などで打ち込まれ 2-10 で敗戦。第 2 戰は坪と藤田で 3 点に抑えたが、打線が 2 点止まりで惜敗。雨で流れた名産大との第 2 戰は、最下位回避のため絶対に落とせない試合。坪が先発し、6 回まで 2 点を先行されたが、山本の四球から今井（経 4・明和）、

後藤、角矢の 3 連打で逆転。9 回にも猛攻で 7 点を追加し、11-5 で圧勝。

第 4 戰の東邦大戦では、藤田が先発し風の影響もあり 3 点を失うも、7 回に山本、今井、後藤の連打で同点に追いついた。しかし 7 回裏に 3 ランを浴び、9 回に三橋のタイムリーで 2 点を返すも敗戦。第 2 戰はシーソーゲームとなり、タイブレークの末、11 回に 7 点を献上し 9-13 で敗戦。

第 5 戰の星城大戦は、勝てば 5 位以上が確定する重要な試合。藤田、坪の両エースを投入。初回から後藤、角矢の安打で先制し、追加点を重ねた。藤田は 7 回まで無失点、坪も 8 回以降を無失点で抑え、4-3 で勝利。第 2 戰では千葉が先発し、廣田、坪がリリーフ。相手投手の制球難を突き、2 回に押し出しと長短打で 6 点を先行。山田（工 4・一宮）の安打から代打三浦（工 4・東海）、高橋（工 4・刈谷）の 2 墓打で追加点を奪い逃げ切り、4 位が確定した。

名阪戦は名大主管で行われ、坪、廣田、森で相手打線を 0 点に抑え、2-0 で勝利。

東海国立戦は名工大主管で熱田球場にて開催。初戦の岐阜大戦では森（経 2・岡山朝日）、立井（工 3・前橋）、伊串（工 4・刈谷）のリレーで 3 点に抑え、13-3 の 6 回コールド勝利。準決勝は昨年敗れた静大との対戦で、坪、藤田が投げ 10-3 の 7 回コールドでリベンジ。決勝は三重大戦で、相手投手を打ち崩せず 0-5 で敗れ準優勝。

七帝戦は北大主管。初戦の京大戦では藤田が完封し、三橋の HR など 2-0 で勝利。準決勝の東北大戦では坪が先発し 8 回まで 1-0 でリードするも、伊串がつかまり逆転を許し 2-3 で敗戦。3 位決定戦の東大戦では廣田が先発し、1-6 で敗れた。

秋リーグは 2 部 B で愛産大、名経大、東邦大、同朋大、名産大と対戦。初戦の名経大戦では 9 回まで 1 点に抑える好投。3 回に山本、今井でチャンスを作り先制するも、タイブレークで逆転され惜敗。第 2 戰では藤田が先発し、6 回まで 4 点に抑え、



打線が 5 点を奪い 6-5 で勝利。

第 2 戰の名産大戦では、坪が 9 回を投げ切り初の完封勝利。打線は初回に 2 点を先制し、追加点も奪い 5-0 で勝利。第 2 戰では藤田が 1 点に抑え完投勝利。三橋の HR などで 7-1 で快勝。

第 3 戰の愛産大戦では、初回に先制するも同点にされ、タイブレークで藤田が 0 点に抑え勝利。第 2 戰は藤田が先発し、1-4 で敗戦。

第 4 戰の東邦大戦では、5 回に同点に追いつくもその裏に 4 点を奪われ敗戦。第 2 戰も打線が沈黙し、8 回コールドで敗戦。

第 5 戰の同朋大戦では、坪が先発しエラー絡みで失点し敗戦。第 2 戰では藤田が満塁のピンチを無失点で切り抜け、角矢、今井の連打などで逆転し、4-3 で勝利。最終戦を勝利で飾り、5 勝 5 敗でリーグ戦を終えた。



最後にマネージャーとして森（工 4・大垣北）、学生コーチとして原（工 4・滝）、学生スタッフとして田中（法 4・関）、星子（工 4・桜台）が支えてくれたことに感謝する。

来期は 2 部 A クラスを目指し、主将米光（情 3・向陽）、副将角矢、持田（教 3・時習館）を中心に野球部の体制強化案を理事会で報告した。

最後に、日頃より先輩会の皆様からのご支援に心より感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

（1983 年卒 監督 柏植竜也）

## 独立リーグでの経験



“独立リーグ”と聞くとどういったイメージを思い浮かべるでしょうか。そう言われても大半の方々はピンとこないと思います。知名度もなく、メディア露出もほぼゼロという場所だからです。しかし、私はそんな場所に2年間所属していました。今回は、そんな独立リーグでの私の経験について語っていきたいと思います。

まず、入団時に私は大学とのレベルの差に大きく驚かされました。その当時、私が所属していた富山 GRN サンダーバーズには、150km/hを超える投手が6人おり、在籍する投手皆 145km/h 以上を投げられました。球速だけでなく球質も高く、今まで見たことのないような球を間近で見せつけられました。そんな中私は最速 143km/h、変化球もスライダーとナチュラルのムービングファストのみという有り様。文字通り最底辺からのスタートでした。

そこで1年目の目標に、①150km/hを超えること、②空振りを取れる変化球を身に着けることに決めました。②に関しては、あっさりクリアしました。色々なチームメイトからボールのリリースや握りを教わり、その軌道を身をもって体感できたためです。そのおかげで、シーズンが始まる4月にはカットボールとフォークというウイニングショットを習得しました。しかし①に関しては中々向上しませんでした。投げても投げても最速を更新することができず、9月にようやく 144km/h を計測したところでシーズンが終わりました。フォームを確認し、色々試行錯誤を繰り返していく内に、いつの間にか1年目のシーズンが終わり、目標としていた 150km/h

を投げることなくシーズンを終えました。

シーズンが終わると独立リーグの選手は”野球をやめる”か”まだ続ける”という2択を迫られます。私は当然”続ける”を選択し、来シーズンに向けて徹底した投げ込みをしました。毎日少なくとも 100 球、多いときは 300 球以上投げる日もありました。今思うと正気ではありませんが、当時は何か少しでも掴んでやろうと必死でした。そして”地面の力の使い方”が分かるようになりました。地面を押して、貰った力をどのようにして効率的に指先まで伝達するか、そんな簡単そうな感覚を1年かけて掴むことができたのです。そしてその感覚はボールにも現れました。今まで垂れたり沈んでいたストレートが高めに伸び、球速も 146km/h を計測しました。私は人生で初めて、ストレートを投げることに成功しました。

翌年も今までの勢いのままに、順調な滑り出しを見せました。シーズン開始から最速を更新し続け、6月には先発に転向し 148km/h をマークし、防御率もリーグ 2 位を記録するまでに成長しました。そしてとあるスカウトからこんなことを言われます。

「150km/h でたら球団に押すことができるから頑張ってくれ。」こんなこと言われてしまったら 150km/h を出すしかありません。トレーニングをより筋力に特化したメニューに変更し、更に瞬発系のメニューの比重を大きく上げました。これは私の人生を懸けた大きな賭けでした。

トレーニングメニューを変えたことでまず現れたのは、計測結果の向上でした。瞬発力の殆どの測定で自己ベストを更新し、試合でも今までのベストだった 148km/h を連発するなど、目に見えて結果が良くなっていました。

しかし夏に入りそこから球速が上がらないどころか、少しづつ平均球速が下がっていきました。先発として長いイニングを投げ、夏になり疲労が溜まっていく中で、高出力のト

レーニングをしたことで、体の細かい箇所が少しだけ動かなくなってしまったためです。こうなると中々元に戻すことはできません。球速だけでなく、コントロール、変化球のキレ、全てを失い、防御率も 6 点台まで落ち込みました。私は人生を懸けた賭けに失敗したのです。

シーズンも佳境に入り、9月上旬、トレーニングメニューの見直しやトレーナーさんの施術などで少しづつ動きが出るようになってきました。しかし、当然 NPB 球団の調査書もなく、その上チームも優勝を逃していました。ここである意味の開き直りをすることができました。

「どうせ終わりなら出し切って終わろう」という気持ちになることができました。すると不思議と球速が上がっていき、150km/h を計測し、ある意味で満足して引退することができました。

これが私の独立リーグ生活の全てです。失敗の連続で夢破れた2年間でしたが、存外に充実していました。才能とは残酷です。凡人がどれだけ努力し全てを野球に捧げたとしても天才はその努力を容易に超え、夢を叶えています。全ての努力が報われるほど優しいものではありません。しかし、その夢に向けて努力し続けた日々は何にも代えようのない尊いものだと私は思うのです。

(2023 卒 横井文哉)

## 2025 年総会案内

2025年2月21日(土)

10時：総会

12時00分：懇親会（会費¥3000）

※現地+オンライン開催です

総会：ウインクあいち 1003 会議室 愛知県名古屋市中村区名駅 4 丁目 4-38

(JR 名古屋駅桜通口 徒歩 5 分)

懇親会：ELLE HALL DINING

愛知県名古屋市中村区名駅 4-3-16  
山本ビル 4F

※1/16までに同封のはがき or メールにて出欠回答ください。

## 1年間を振り返って

先輩会の皆様、4年間多大なるご支援とご声援をいただき本当にありがとうございました。特に、今年度におきましては、バッティングマシンの修理やバンテリンドームでのOP戦開催など非常に恵まれた環境で野球をさせていただき練習にもより一層。先輩会へのご報告を兼ねて、この1年間を振り返ってみたいと思います。

昨年の秋リーグから2部に復帰した私たちは、先輩方の力もあり2部残留を決め、2部でもやれるという手応えと、先輩方が抜けた穴や自分たちの力不足による不安をもつて新チームとして始動しました。新チームには昨年から試合に出ていたメンバーも多かったため、先輩方が引退するまではそこまで不安を感じていなかったのですが、やはり抜けた穴は大きく、各個人のレベルアップに加え新戦力の台頭が必須であると新チーム始動後すぐに感じました。

強化リーグでは、リーグ戦経験の少ない下級生にも出場機会を与え、各個人の課題を把握させるとともに、チーム内での競争の活発化を図りました。投手陣では藤田と坪の2枚看板を支えるリリーフ陣の強化、野手では打線強化を目指し、試合を重ねるごとに成長が見られました。

冬のトレーニングでは、山本トレーナーからウエイトトレーニングのメニューをいただき、週4回の練習時間以外でのウエイトトレーニングを行いました。また、練習の最後にサーキットトレーニングも行いフィジカル面で大きく成長できました。私が1、2年生の頃に感じていた2部の私立大学との体格差は確実に縮まっていたと思います。

2月の和歌山合宿では天候に恵まれ、充実した合宿を行うことができました。昨年に引き続き振り込みや投げ込みによる基礎体力の強化に加え、実践練習も行い、リーグ戦に向けて良い練習ができました。

迎えた春リーグ。結果は4勝6敗

で4位という結果に終わりました。1部昇格を目標に冬の練習を重ねてきましたが、春のリーグ戦では思うような結果を残すことができませんでした。1週目では打線が振るわず2連敗からのスタートとなり、リーグ戦終盤では投手陣が踏ん張り切れず投打が噛み合わない試合も多くありました。一方で、課題が明確になり収穫もあったため自分たちの取り組みを見つめ直す良い機会になりました。

今年の七帝戦は北海道での開催だったため、8月であるというにも関わらず、涼しく快適な気温のもと、野球をすることができました。名大にとっては2連覇がかかった大会でしたが準決勝で東北大学に敗れ、3位決定戦でも東京大学に敗れ4位に終わりました。しかし、初戦の京都大学戦では藤田が大学野球最初で最後の完封勝利を挙げるなど充実した大会となりました。また、レセプションでは他大学との交流を深め、野球談議に花を咲かせました。

そうして迎えた秋リーグ。私たちは再び1部昇格という目標を掲げ、試合に臨みました。結果は5勝5敗5位という悔しい結果に終わりました。3節目では優勝候補筆頭の愛知産業大学に先勝し、一時は首位に並びリーグ戦を折り返しましたが、後半戦では勝利を積み重ねることができませんでした。一年間、1部昇格を目指してきましたが優勝どころかAクラス入りを果たすことができず、非常に悔しく感じています。しかし、その中でもチームとして、各個人としての成長を感じることのできたリーグ戦もありました。名古屋経済大学との2戦目の逆転勝利や、愛知産業大学にタイブレークの末、勝ち切れたことは春のリーグ戦から見ても大きな成長であったと思います。ビハインドの状況でも元気よく守備に送り出してくれるベンチ陣、偵察や練習のサポートをとことんやり切ってくれる学生スタッフやマネージャーなど、試合に出ていないメンバーの力を非常に感じたリーグ戦でした。結果としては悔しさが残りますが、後輩たち

が思いを引き継ぎ結果に結び付けてくれることを期待しています。

私の4年間の大学野球生活は挫折から始まりました。高校時代は大学でもそこそこやれるだろうと思っていた自信を入部早々、碎かれました。だからこそ這一上がることができたし、たくさんの経験をさせていただき、本当に感謝しかありません。新チームが始動してからの1年間は苦しかったことの方が多く、後悔していることもたくさんあります。自分が発する言葉に主将としての責任が付きまとった高校時代のそれまでとはまた違った類のものでした。学生主体の大学野球だからこそ感じるプレッシャーに押しつぶされそうなときもありましたが、その中で自分で考え、工夫し行動することを大学野球で学ぶことができました。

また、私の同期部員は人数も多く全員がリーグ戦のベンチに入ることはできませんでした。その中で、スタッフとしての道を選択し最後までチームのために尽くしてくれた部員が多くいました。スタッフがチームの勝利を強く願ってくれていたことが私たちの励みになりました。本当に感謝しかありません。後輩たちには選手として野球ができるとの喜びを感じ、残りの大学野球生活を全力でやり遂げてほしいと思います。

最後に、このような素晴らしい環境で野球ができたことに本当に感謝しています。先輩会の皆様、監督、コーチ、マネージャーやスタッフ、保護者の皆様、そしてチームメイトの支えがあったからこそ、ここまで野球を続けることができました。全ての方々に改めて感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。(前主将 三橋新)

## HP案内

<https://nagoya-univ-baseball.com/>